

## 抑留記

千葉卓 榎本義雄

終戦を過ぎた昭和二十年十月十九日、私達は北朝鮮の咸興(ウツツ)から二個大隊(一個大隊千人)乗船させられた。私の大隊は中隊長であった増田大尉が大隊長、そして私、榎沢(旧姓)曹長が副官として、ウラジオストック経由で内地送還との話で、喜びと希望で乗船した。しかし船内生活三日間、その間諸々の思い出や流言飛語が流れ、敗戦国の私達捕虜はいかなる虐待を受けるであろうか、諸々のことを想像して、海を見下ろしてはいっそのこと飛び込んで死にたいような気にもなった。

そのうちに船はウラジオストックに到着した。上陸後、野戦帰りであろうか荒々しいソ連兵連が「ヤポンスキー(日本人)ダモイダモイ(帰国だ)」。その言葉に嬉しいやら不安やら種々想像しているうちに有蓋貨

車に詰め込まれた。

監視兵付きで、用便、糧秣受領以外は外には出られない。臭気と「人いきれ」の貨車の中、その列車は北へ北へと進む。不安であった。食糧はメントイ(スケトウダラ)一日七匹、三日間の貨車生活は終わった。着いたところはメンレバロフという田舎町の収容所であった。

夕方五時頃であったが、ソ連本部と私達幹部だけ幕舎を張り、その他の者は野宿ということになったが、三日間のメントイ生活で喉が渇くし、腹が空いてどうにもならなかった。

私は大隊副官として、ソ連本部に水と食糧の要求をした。ソ連側は私の要求を承知したものの、野戦帰りの兵士は私が腕にはめていた金文字腕時計に目をつけ、それをくれとせがんだ。食糧と水を何とかしなければならぬと思ひ、通訳がいないので手まね足まねで漸くのこと納得させたが、私からは腕時計が消えた。

水汲みも案内してくれた。薪も用意して一日一人当たり三合の米をくれた。皆、喉が渇き腹は空き、一人

ずつ飯盒で炊いた三合飯を一度に食ってしまった。翌日半数以上の者が腹痛と下痢で大騒ぎとなったが、その翌朝は皆おさまったようである。

その翌朝いよいよ三人ずつ身体検査と服装検査で逐次収容所に入れられた。二千人全員が収容所に入るまで二日かかった。

検査の時にはヒモ類を全部取り上げられた。困ったことに越中ふんどしも取り上げられ、皆フルマラであった。後で聞いた話であるが、我々が首を吊ると思つて取り上げたらしい。しかし、ふんどしだけは交渉して漸く返して貰った。

十月二十七日いよいよ捕虜としての生活が始まったが、一週間位は毎日身体検査や点呼やらで、その間一、二、三級に決められた。三級の者は他の収容所に転送され、結局体の頑健な一、二級の者が残されたのであった。その人数は五百人位になった。だがこの部隊には通訳がないので私がソ連本部との交渉に当たり、言葉が通じないため随分と苦勞の連続であったが、少しでも皆が有利になるよう懸命に勉強して、約三カ月位

して殆どの言葉を話せるようになった。とにかく我々の収容所は本当に田舎なので、野天風呂で設備も悪く水も無く、寒さと狭い部屋に多人数入れられ、不衛生のためか疥癬かたが発生してきた。また冬になると寒さと栄養失調で死亡者が出始めた。

入浴は普通は三日おき位で、はじめのうちはシラミが湧き、休日にはひなたでシラミつぶしに専念するありさまだった。けれど氷点下三十五度以下になって衣類を野外に出しておくとしラミの卵も死ぬ程だった。とにかく水の少ない所で冬は凍結し、ソ連兵のコップ一杯の水で歯を磨き洗顔するという器用さには、節水という点で見習う必要があった。

私達の収容所の食糧は、週二日位は僅かな米、その他は黒パンとスープ、たまに入っている肉は元軍馬であつたらう硬い馬肉か豚の頭だけ。それだけに皆の目は食糧の配給に集まる。スープの配分は二個の飯盒を天秤にかけて計り分配し、それは非常に深刻なものであった。

私どもの収容所は、約二年半位の間に二十二人の方

が栄養失調や環境不備のため病氣にかかり死じするという痛ましきであった。

空腹に対する人間の執念は恐ろしいものだった。あの時兵隊が屍衛兵に立ったことがあった。その兵隊は空腹に耐えかねて死者の目玉を食べたこともあった。ともかく私達がいかに寒さと飢えに耐えてきたか、読者の皆様には想像もつかないことだろう。

亡くなられた同僚のご冥福を心からお祈りし、筆を止める。

## タタールの丘、ヴォルガの流れ

石川県 荒川 宏

ここ数年来、戦争にまつわる話を聞きたいという人が増えてきたように思う。

帰国後十年ほどの間は、時々夢にうなされることさえあった抑留の暗い残像など、家でも語ったことがない。五十年を経た今日では、全く茫漠として忘却の

なたに押し流されていきつつある。ほんの追憶に残る断片の中から、その二、三を話そう。

### 虜囚の悲哀

昭和二十年十二月半ば、ポーランドのカチンの森の連想（将校の大量虐殺）に脅え、ソ軍のコンボーイ（護衛兵）の強奪に遭いながら、辿り着いた森の中の半洞窟の収容所ラーダ。着いた夜すぐにバーニャ（入浴場）に引率された。身に着けている物全部を針金の輪に通して、熱気消毒の準備をする。

瞬時に冷え込んだ裸の一群に、漸く順番がきて一列に並んで控室に飛び込む。ハンガリー人らしい勤務者が、片手にバリカンを持って次々と陰毛と腋毛を刈る。ソ連のシストラ（看護婦）がジツと監視している。

「捕虜になってしまったなあー」と、言いしれぬ悲哀の実感が胸にこたえた。

### タタールの丘を越えて

ダモイ（帰国）か、との期待は見事に外れて、森の収容所から東行した列車はキズネルの駅にとまってしまった。エラブカまでの七十五キロを昭和二十一年七